

沢野地区における野菜栽培に関する調査及び地区の活性化

指導教員：金沢大学法学系 准教授 宮本誠子

参加学生：尾崎稔史・山本優・小田ひなた・高津彬・高溝瑞季・弥浦優香・村田晴香・大橋葵・木口侑紀

1. 調査研究成果要約

イベント等を通して地域の方との交流を深めると同時に、沢野ごぼうを活用する様々な手段を模索した。それと同時に、今年度から栽培を開始した「大長にんじん」に関する調査を実施し、沢野地区の土壌の性質等を加味した上で、これらの野菜栽培・販売を行うことで耕作放棄が顕著になりつつある沢野地区にとって効果的な影響が及ぶのではないかと考え活動を行った。

2. 調査研究の目的

「沢野ごぼう」は石川県七尾市沢野地区で栽培されるごぼうである。沢野地区特有の粘土質の土で育てられ、通常の3倍の太さ、強い香り、やわらかい肉質といった特長をもっている。様々な料理に使用可能であるため、これまで金沢大学法学部知的財産法ゼミでは、自分たちも収穫作業を手伝い沢野地区の方々と交流を深めつつ、居酒屋へのごぼうの提供・料理考案の依頼、PR活動を兼ねてジェラートやタルトなどをイベントで販売するなどといった活動を行ってきた。昨年度は特許や商標など知的財産法ゼミが専門としている研究を活かし、「沢野ごぼう」の名称で地域団体商標の出願を行った。ブランド力の向上を図ることで更なる話題性の獲得、顧客の信頼性の上昇が望めるのではないかと期待している。

しかし、沢野ごぼうは現在、生産量不足・人手不足という大きな問題を抱えている。もともと粘土質の土で栽培するため収穫作業に多大な労力をかける必要があることに加え、過疎化の影響で耕作放棄地も増加し、生産量は非常に減少しているという現状にある。商標獲得により知名度の向上は図れる可能性があるが、その後どのような方法で沢野地区を活性化させていくかという面についての検討はこれまであまりなされていなかった。そのことを考慮した結果、今年度は、昨年度までの活動を踏襲し、あくまでもごぼうを基軸にしながらも、それだけに限らず沢野地区全体の統括的な問題を解決・改善していけないかと模索した。それに関連して、今年度から生産を開始した「大長にんじん」について様々な施設・人々のお話を伺い、育成・販売についての検討を行っている。また、私たち学生が積極的に活動に関わることで、他の農業系の大学との交流を深めたり、メディアを通して不特定多数の人々に沢野や沢野ごぼう、他の野菜の生産に興味を持っていただけたり出来るよう、訪れる人々、ひいては生産者を生み出すきっかけを作る活動を行っていき、沢野地区の活性化を図ることを最終的な目的とした。

3. 調査研究の内容

①「地域団体商標に関して

平成21年7月17日付けで出願した地域団体商標「沢野ごぼう」について、今年9月3日に特許庁から拒絶通知が發送された。地域団体商標の取得をするためには、「その商標を使用した結果、自己またはその構成員の業務に係る商品または役務を表示する者として需要者の間に広く認識されている」必要があるのだが、昨年提出した手続補足書、並びに同年11月19日付けで提出した手続補正書ではその周知要件を確認することが出来なかった、というのがその理由である。

沢野ごぼう事業協同組合は、今年9月26日、後述する沢野ごぼう井の審査における審査員であり、昨年度この事業の指導教員であった金沢大学法学部大友信秀教授の助言を得て、「納付書コピー等に関

する資料」「テレビ放送内容に関する資料」「沢野ごぼう祭りに関する資料」などの周知性に関する資料を、新たな手続補正書などとともに全 74 枚特許庁に 10 月 13 日付けで郵送した。今後は特許庁からの連絡を待ち対応をする予定である。

②沢野ごぼうに関する活動

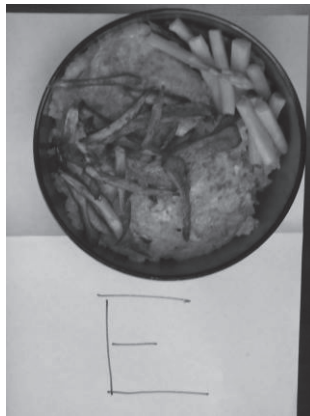
(1) 沢野ごぼう井

沢野ごぼう事業協同組合や地域の方の発案により、今年度 9 月 26 日、沢野ごぼう祭りに出品するごぼう井のコンテストに参加した。

地元の主婦グループのほか、一般の方から寄せられたレシピを作るグループなど、6 チームが参加した。私たちは、ごぼうの風味や触感を際立たせて主役にするために肉をあえて使わず、豆腐とごぼうだけで「あんかけハンバーグ井」を考案・調理し、出品した。惜しくも祭りで出品される井には選ばれなかったが、審査員の方から学生ならではの新鮮な視点だと高い評価をいただいた。



沢野ごぼう井制作の様子



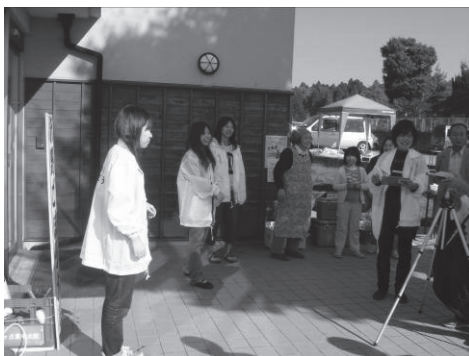
私達が制作したごぼうあんかけバーグ井

(2) ごぼうの収穫

10 月 10 日、ごぼうの収穫に協力した。普段あまり体験しない農作業に新鮮さを感じたり苦労を味わいながらも、沢野がどういう場所か、どんな方たちなのかをそれぞれ感じる事ができた。昼食を村尾さん宅で頂きながら、過去に沢野ごぼうが取り上げられたテレビ番組の観賞を行った。

(3) 沢野ごぼう祭り

11 月 7 日の沢野ごぼう祭りに参加してきた。ごぼう井のコンテストで選ばれた井が限定 50 食で販売された。私たちは受付、そして配膳のお手伝いをした。昼過ぎには完売するほどの大盛況だった。そのほかにも、ごぼうの販売のお手伝いをした。



ごぼう祭り参加の様子



販売された沢野ごぼう井

(4) ごぼうの栽培方法の検討：専門家への聞き取り

11月12日、津幡の農林事務所課長の稲葉さんのもとへごぼうの栽培方法の改良についてのお話を聞きに行った。そこでは、沢野がなぜごぼうの栽培に適しているのか、にんじんを沢野の土地で栽培することは土質的に可能かどうかを教えていただいた。農業について全く無知だった私たちにとっては初めて知ることがあまりにも多く、驚いた。沢野の土は、肥料などで養分を加えたりしなくても、ごぼうだけでなく、様々な野菜の栽培に適している pH の値であることが分かった。

11月19日には、更に石川県農業総合研究センター・資源加工研究部部長の北田さんを訪問し、更に沢野の土壌について教えていただいた。土壌の採集を行い、どの成分がごぼうにとって良い成分なのかを調査しようという当初の予定であったが、採集方法が相当の労力を要すること、また前述のように沢野の土壌は既に十分な栄養を蓄えており、必要な養分は肥料で補うことが可能なことなどから、土壌の採集は、広範囲の土質の分布を図書館で調べることで代用することで十分だということになった。

ごぼうの栽培方法の検討も、兼業農家が多くごぼうの管理が大変な沢野の方たちの助けになったと考える。どの野菜の栽培にも適しているという沢野の土の強みも理解できたので、今後は、ごぼうで確立した沢野のブランドでにんじんをはじめとする様々な野菜を栽培し、売り出していくという可能性も見つけることができた。

③大長にんじんの栽培に関する調査

(1) にんじんを栽培するようになったきっかけ

沢野の方たちは、今年からごぼうに加えて、新たに大長にんじんを栽培することにしたとのことだった。大長にんじんは名前のごとく、とても長いにんじんである。沢野ごぼう自体もとても長く育つので、長いごぼうとにんじんをセットで売ったら、とても強いインパクトになるのではないかと理由で、大長にんじんの栽培を始めたようだ。また、ごぼうの代表料理であるきんぴらごぼうにはにんじんが不可欠である。そのことからにんじんの栽培を決心したようだ。しかしながら、今年、6坪にまいたにんじんはほとんどが育たずに枯れてしまい、大きく育ったのはたった1本だけであった。そのことから、大長にんじんを育てるのに沢野の土地が適しているのか、また、にんじんの栽培方法について学ぶことが、今年の課題としてあがった。

(2) 調査

沢野の方たち、また、私たちゼミ生にとって、大長にんじんは種まきの時期はおろか、栽培方法さえも分からない状態であった。また、そのようなにんじんを販売しているところを見たことのある人も多くなく、どのように売り出していくのかさえも分からなかった。そこで、まず、大長にんじんを栽培している場所と販売している場所を探すことから始めた。その過程で、「大縄にんじん」ではなく「大長にんじん」であるということが分かった。

(3) 接触

調べを進めていくうえで、宇都宮大学の農学部附属農場で沢野の方たちが栽培を考えている「万福寺^{まんぶくじ}鮮紅大長にんじん^{せんこう}」という品種が栽培されており、山梨県^{にしやしろ}西八代郡のJAで同じにんじんが出荷されていることを知った。

A、にんじんの総論的な栽培方法の調査

11月12日、津幡町の農林漁業事務所の稲葉さんのもとへお伺いした。そこでは、にんじんの栽培において注意することを教えていただいた。また、にんじんはごぼうとの相性がいいこと、沢野の土はにんじんを育てるには適していることなどをお聞きした。

B、宇都宮大学の農学部附属農場への質問状の送付と訪問

石川を含む北陸3県で大長にんじんを栽培している場所を発見することはできず、範囲を全国に広めて探していたところ、宇都宮大学の農学部附属農場で大長にんじんを栽培していることが分かった。そこで、いま沢野地区が直面しているにんじんの栽培の問題について、附属農場の方とメールのやり取りをした。また、実際に栽培している場所を見学しに栃木県真岡市にある附属農場を訪問した。そこで、ごぼうとにんじんは栽培の際に使う農機具が同じであることから、適切な栽培方法を実践すれば、沢野地区が新たににんじんを作ることはたやすいのではないかというお話をお聞きした。また、当農場ではごぼうとにんじんと他の野菜を一年ごとに違う畑で育て（輪作）、連作障害¹を防いでいるとのことだ。



宇都宮大学で収穫された大長にんじん



宇都宮大学附属農場

C、山梨県西八代郡のJAへの聞き取り

山梨県西八代郡の大塚地区では、江戸時代から長にんじんを育てていたが、近年になって栽培が途絶えてしまっていた。そこで10年ほど前から長にんじんの栽培を復興させ、秋にはその地区でごぼうを売るイベントを開催しているとのことだ。栽培を復活させた点や、収穫後に地区で祭りを行っている点が沢野によく類似していると感じた。

当JAでは、大塚にんじんを主に地元のスーパーに出荷しているそうだ。スーパーでの販売価格としては、1kg400円ほどであり、地元の特産品として普通のにんじんに比べて高めに値段設定されているそうだ。60cm以上のにんじんだけが「大塚にんじん」として売られ、それ以下の者や収穫の段階で折れてしまったものなどはドレッシングの材料として業者に1kg300円で販売しているとのことだ。

大塚にんじんの味は、にんじんの臭いが強く、昔ながらの味がするため、年配の方に人気があるのではないかとのことだった。

¹ 同じ科の植物を同じ畑で長い間育てることによって、生育が悪くなったり、その植物特有の病気が発症するリスクが高くなったりすること。詳しい原因はまだ分かっていないということだ。

D、神奈川県川崎市のにんじん農家と沢野の方たちとの顔合わせ

さらに調べてみたところ、同じ品種の長にんじんを神奈川県川崎市の高橋さんという方が作っていることが分かった。今回は日程の調整がうまくいかず、沢野の方たちと高橋さんを引き合わせ、生産者同士でお話をさせていただく機会を設けることはできなかった。しかし高橋さんは、実際に沢野地区に赴くことについて意欲的であるので、近いうちに実現させることは可能であると考えている。

4. 調査研究の成果

①沢野ごぼうの発展性

今回のごぼうに関する活動は、沢野ごぼうの強みをゼミ生全体で理解し、共有する上でとても意義のある活動になった。私たちゼミ生が今後沢野ごぼうを売り込んでいくうえで大きなプラスになったと言える。沢野ごぼう井の開発の協力は沢野ごぼうのインターネット販売を開始する際に、調理例としてあげることができ、今までにはない斬新な使い方を買い手に提案できるようになったと考える。また、ごぼう祭りへのゼミ生の参加は沢野地区に大きな活力をもたらしたと言える。私たちが沢野地区に行かせてもらうことにより、メディアへの露出が頻繁になり、沢野ごぼうはもとより、沢野地区全体の知名度の向上に寄与したということができただろう。(現に、収穫の記事を見たという金沢在住の方が、沢野ごぼう祭りに足を運んでくれている。)

②大長にんじんの栽培に関する調査結果

専門家への聞き取りを行うことで、現実には生産に関わるよりも増して、農作物について考えることができるようになった。生産する側と販売する側の乖離は従来から問題視されていることである。私たちは今まで販売する側として沢野に関わってきたが、生産の側を学ぶことで、更に私たちが関わっていく野菜の強み、魅力を見つけていく手助けになっていたと考えられる。また、日本の農業が直面している後継者の問題、輸入物との差別化などについて専門家の方の意見をお聞きすることができたのは、これからの農業を考えることがいかに自分たちにとって身近な問題であるか考えさせられる機会となった。

5. 調査研究に基づく提言

沢野地区には高齢化の影響もあり、耕作放棄地が多数存在している。その解消に向けて、ごぼうだけでなく他の作物を育てる試みは大きな糧になると考えている。また、今年は農地のレンタルに向けた相手探しを目標としていたが、貸し出すのを個人にするのか、企業にするのか、また、貸し出す形式や値段など、詳細を詰めていくことはできなかった。しかしながら、今年の調査の過程で、ごぼうとにんじん、その他の野菜を組み合わせることによって、輪作を実践することで、耕作放棄地を解消できるのではないかと可能性ができた。そればかりではなく、連作障害の防止できるのではないかと考えている。

このように今回得た知識を、野菜の生産に対して、更には来年度以降大長にんじんの販売が可能になったときには販売に対しても活かしていく必要がある。そのためには具体的にどう発信していくかという手法を定め、ごぼうと同じ消費者層に受け入れられるのか、新たな消費者を獲得していくのか、などのことに関する調査を行うべきであろう。

6. 調査研究の自己評価

今年度は、昨年までの大友ゼミで過去2年行ってきた商標取得活動を引き継ぎながら、これとは別に、

学生として私たちが沢野のために何が出来るかを考え活動を行ってきた。当初、地域の方に私たちが農業の知識が乏しいままに活動に携わろうとしていることを問題点として指摘されたため、多数の専門家の方のもとを訪問し、ごぼうやにんじん、ひいては沢野の土地等の現状について詳しく学べた。このことはゼミ生にとって大いに身になることであり、来年度以降の活動にも役立つ知識を得ることが出来たと言える。その反面、これから具体的にどういった活動をしていくかを地域の方に積極的に私たちから提案することが出来なかったという問題点があったと考えられる。また、活動していった中で、当初自分たちが「こうしたい」と考えた活動が本当にやる意義があるものではなく、また考案し直すという事態も生じた。もちろん活動していく中で必要・不必要が初めて分かる場合も多かったが、農業という季節を選ぶ分野である以上、自分たちの考えたことがどういう結果を及ぼすのか、本当にやる意義があるのか、といった計画の現実性・効果の程度の十分な検討が大切なのだということを実感した。更に今年度は沢野地区内でのイベントに参加することが多かったが、それでは沢野やごぼうのことを全く知らない人たちの訪れが期待し難い。私たちが沢野の外で興味を持ってくれる人を確保することも地区の活性化につながるのではないだろうかと感じた。

来年度からは、今年度に得た農業の知識を活かしつつ、ごぼうに限らない様々な野菜の、沢野地区にあった栽培方法を地元の方と一緒に考えていき、更にはその野菜の売り出し方など、沢野の方の意向に沿った形での関わり方を模索していきたい。私たちとしては、栽培した野菜がどういった客層に売れるのかを実際に野菜そのもの、あるいは加工品を販売しつつ調査していきたいと考えている。